

いろいろなことを教えてくれる子どもたち ④

村石 京子

大雪のこと

この項を書いている今日はお彼岸の中日、春分の日なのですが、東京は昨夜から引き続いてのみぞれ模様の空です。昔から暑さ寒さも彼岸までと言われているのに、今年はどうも例年になく春の訪れはおそいようです。

冬の間は寒さがとても厳しくて、東京も大雪がよ

く降りました。窓ガラス越しに、空から果てしなく降りてくる羽毛のような綿雪に見入ったり、きらきらと朝日を浴びて輝く銀世界に歓声をあげたりしたものでした。そして外に出ると、夕べからの積雪が凍りついた道路であやうく転倒しかかったり、なれない雪かきに汗だくになったりと、雪の珍らしい都会人間はいつもの冬とは違った経験をして、北国の冬の厳しさをほんの少しかいま見た年でもありません。

た。

幼稚園の子どもたちは、とにかくこの珍らしい情景に大喜びしたものです。長靴・オーバー・帽子・手袋と防寒支度に身をつつみ、嬉々として園庭に飛び出していきました。そしてひとしきりはずぶずぶと雪の中を走りまわり、友だちに雪玉を投げあった後、雪滑りや雪だるまつくりで熱中しました。

けれどこの雪も珍らしいうちはよいとして、何回ともなってくると、私たち大人は電車の往き帰りだの、家に在ったりするときは何だかもううんざりねと言いつつあつたものです。でも不思議なことに、幼稚園の子どもたちと過ごす時間になると雪はいつも清々しく美しく見えて、私も子どもたちと同じように、冬の天からの贈り物に心はずむ思いがしたのは何故だったのでしょうか。多分、子どもたちの持っている囲りのものを楽しくしていく遊び心が、自然に私にも伝わってきたからだと思います。子どもたちは、背丈よりも大きな立派な雪だるまをつくった

り、かまくらをつくって入ったり、雪のすべり台をつくって箱ぞりで滑り降りたりして大喜びでした。こんなあそびは子どもたちは生まれてはじめてで、すっかり雪あそびを満喫したことでしょうが、私も就職以来初めての新しいあそびにびっくりしたり、楽しかったりしたものです。

それにしても日が経つと、大通りから寄せられた雪の山が、ほこりをかぶって汚なくみじめになり、とけて消えてはまた降り、とけて消えてはまた降るのくりかえしに、大人たちの間ではもうたくさんとこぼし合われるようになっていきました。けれどそれにはひきかえ、幼稚園の庭や山に降った雪は、ずっと冬のおそびを堪能させてくれましたし、そして最期に残った雪でさえ、ビニール袋に詰められて大事なおみやげとして大切にされていました。珍らしいときだけ喜び、自分たちの生活にプラスにならないとわかると見返りもしないことの多い大人の社会には、これと類似したことが数多くあるのではない

だるうかと、子どもたちの様子と比べて、反省させられたりしたものです。

ピンクの傘

そんな雪のある日のことです。「明日は東京地方に又々雪が降るかもしれません。」と昨夕の天気予報で言っていたのに、今朝空が明かるかったり、いそいだりが重なって、私は傘を持たずに出て来ました。十時過ぎから粉雪がちらちらしていたと思うと、間もなくせきを切ったように白い花びらが舞い降り降りました。「あ、また雪が降って来た。」やんだら雪あそびしようね、先生。」と早くも心はずませている子どもたちです。画用紙でメガホンをつくらせて「東京地方は大雪注意報です。」と知らせている小さな予報官もいます。

私はガラスのドアから降りしきる空を眺めて、「置き傘あったかしら？」など思っていたとき、傍へ来たS子は私の心が伝わったかのように、「先生、

傘持って来た？」と聞きました。「ううん、今日はね、朝降ってなかったので持って来なかったわ。」と言うと、「S子はね、朝降ってなかったけど持って来たのよ。本当よ。ピンクのよ、新しい傘だもの。」と、とても得意そうです。そして「先生、おうち帰れる？ 傘なくちゃかあいそうね。」とちょっぴり同情もしてくれました。が、次々と他の子どもたちとのかかわりあいもあって、今の会話はこれで打ち切りです。やがておべんとうもすみ、帰る時間になったとき、S子がそばへ来て急にこう言いました。「S子ね、大きくなったらね、先生にね、傘あげるわね。私のきれいなピンクの傘あげるわね。大きいから先生だつて入れるわよ。」私は胸がじんとしてしまいました。S子の心の中には午前中の私との会話がずっと繋がっていて、自分が新しい傘をさして帰る前に、自分の気持を一言言い現わしたかったのでしょう。いつも順番が待てなくて「私が」「私が」といいはる自己中心的な面が強いと思っていたS子

が、雪が降って困るでしょうという優しい気持の現われとして語ってくれた言葉に嬉しくて、子どもたちが帰ってからも、真白く染められた戸外にS子のピンクの傘が見えるような気がして、しばらく園庭を見つめていた雪の日のことでした。

自己中心性が強く、自分本位な行動やものの考え方の多かった三才児が、一年間一緒に生活している間に、次第にまわりが見えるようになり、他を思いやる心が育ってきたりしているのを知る機会にめぐりあうと、何事につけ本当に目を細めなくなるような気持がします。三才児学級は小人数なので、その中でゆったりと自己を伸ばしながらも、折にふれて他を知る機会をもちました。集団の中の繋がりをつくりながらも、個を大切に育ててきました。そして今は、教師がなかだちをとりながら、友だち関係も

淡いながらも育ってきているこの年度の終りの時期です。四月からここに新入の四才児がまじって一学級を構成し、新しいスタートが切られますが、その中で子どもたちはお互い同士数々のことを学び、教えあって育っていくことと思います。そしてまた私にも、大人になってから忘れかけていた大切なことや、優しさや、新しい発見や、喜びびなど、いろいろなことを教えてくれるでしょうと楽しみながら、春の間近いこの頃なのです。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

